

アイデンティティ意味論とグローバリゼーション

Semantics of Identity and Globalization

鎌田 勇
Isamu Kamada

要 旨

現代社会の分析、とりわけ国際関係の考察において、「アイデンティティ」は欠かせない概念となっていることは疑いないところであろう。国際関係、或いは異文化コミュニケーション状況において、文化的自己性、独自性、差異等の語感を示唆するものとして用いられる。だが、「文化」と近似的に用いられることで単に個人意識の外的装置というだけでなく、精神構造を内的に規定し、行動の動因となっていることも、一定程度理解されている。しかしだからこそ、分かり難い面を持つことも事実であり、正確な意味の把握が、とりわけ片仮名表記をしている日本ではされていると言いがたい。本稿はアイデンティティの意味を再考しようとするものである。しかし、単に提唱者であるエリクソンの理論を再検討するだけでなく、そこに現代的意味を読み込み、現在進行中といわれるグローバリゼーションに於けるその概念の重要性を検討する。基軸となるのは、「差異化」と、アイデンティティを先鋭化する、近代社会と国際関係の現代的状況である。

Abstract

For examining contemporary society, especially in international relations, there would be no doubt that “identity” is an indispensable concept. The term is used to signify one’s own culture, uniqueness, difference and so on in the context of international relations or intercultural communication. It is generally understood that “identity” is not only an outward apparatus of individual consciousness, as shown in its close usage to “culture,” but also that it confines the mental structure as a causal factor of behavior. That is why, the concept is somewhat difficult to understand. In Japan, especially, where the word is written in *katakana*, it can be hardly said that its concept is completely understood. This paper aims to reconsider the meaning of identity. Nonetheless, the aim is not just to reexamine Erikson’s theory, which has originally referred to the concept in the current sense, but also to discuss its significance in understanding ongoing globalization, considering its relevance to contemporary conditions. The pivots are “differentiation” or distinction, and modern society and the international situation, which sharpens the awareness of identity.

はじめに

ハンティンソンの著作、『文明の衝突』¹⁾は2001年9月11日 N. Y. 攻撃（ニューヨーク同時多発テロ）発生直後から売れ行きに火がつき、店頭から姿を消して品不足は当分続いたと言われる。同書は、ポスト・冷戦期、対立の基軸はイデオロギーからアイデンティティへとシフトされ、異文明間

の戦争が焦点となると論じ、その予言が的中したと話題を呼んだのである。同書ではアイデンティティの概念は前提的に扱われ、何を意味するのかは正確には論じられていない。だがそれは、同概念が使われていない書を探すのが難しい、国際関係のどの書を取って見ても同じである。

現代的な意味でのアイデンティティ概念を最初に提唱したとされるエリクソン Erik H. Erikson は1968年に、この概念が提起されてからの20年で、一般的に流布した用法は非常に多様化、拡大する

1) Samuel p. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Simon and Schuster, 1996 (『文明の衝突』鈴木主税訳, 集英社, 1998年)。

と共に自明化した概念と見なされ、時にはあまりに広義に用いられ、時にはあまりに狭義に用いられ、本来の意味が失われてしまいがちだ、と指摘している²⁾。そして彼は、「アイデンティティが何であり、何でないかを、より良く、かつ最終的に定義する時が来たようだ」と述べている [Erikson, 1968:15]。しかしそれから30年以上が経った現在、この概念は、エリクソンが意図した意味を正確に反映して用いられているとは言い難い³⁾。

精神分析学の心理療法家である彼は、精神分析の自我による防衛機制 defense mechanism としてこの概念を指定した。それは静的実体を指す概念ではなく、力動的 dynamic 心的プロセスである。当概念の正確な理解には精神分析理論に一定程度精通していることが必要になる。精神分析理論が比較的知られていない日本では、その理論構成を理解することが一層困難になる理由がそこにある。精神分析学が広く受け入れられている米国でのこの概念の一般化には、下地があったとも言えよう。とはいっても、それで米国一般に概念が正確に理解されている、ということにはならない。エリクソンは、他の社会学者がアイデンティティを「社会的役割、性格特性、意識的自己像などといったものとして扱い、この概念が持つ、より扱い難い、またより邪悪な sinister ——それはまたしばしばより活力に満ちていることを意味するが——含意を捨て去ろうとしている」と述べている [1968:16]。この「邪悪」で活力に満ちた側面が何であるかを理解する必要がある。

米国でのアイデンティティ概念の浸透は、「自己」への関心の高さが背景としてある。個人主義が浸透した文化を基盤とするのである。日本でアイデンティティ概念が次第に一般化してきたことは、個人主義、自己への関心の高まりを反映している。しかし、精神分析学理論の理解が臨床心理学分野を除いては限られている。精神分析理論が日本で広く受け入れられてこなかった理由は、その精神トポロジー的機械論、理性主義的二元論に

あるといえるだろう。

現在のアイデンティティ概念への関心は、文化との関連に於いてである。それはエリクソン自身による当概念の社会学的方向付けと矛盾するものではない。また、エリクソンは、アイデンティティの内容は時代と共に変わってしかるべきだとも認めている [1968:15]。

本稿に於いては先ず、エリクソンの精神分析学に基づく理論構成を見てゆく必要がある。そして更に、エリクソンを越え、その概念の現代的含意を汲み出すことを試みる。

意味論

英語 identity の語源はラテン語の *ide* (m) で、同一を意味し *sameness* と同義である。よく用いられている語は *identify*, *identification* で、前者は動詞で「同一視、同定、確認、鑑定する」といった意味があり、例えば “A was identified as the criminal by the police.” (「A は警察により犯人であると確認された」) といった使い方をされる。*Identification* は *identify* の動詞形でもっぱら「身分証」の意味で、ID と略して用いられる。それに対し、*identity* は「同一であること、本人、身元」といった意味であるが、現在のような自己同一性のような心理的意味で用いられるようになったのは、精神分析学者のエリクソンの用法によるところが大きい。

片仮名で「アイデンティティ」と表記されると、こうした英語の語感が失われ、単なる無意味綴りとして意味が独り歩きする。それはすべてのカタカナ語について言えることである。だが、アイデンティティの難しさは語感の問題だけではない。「同一性を形成する、維持する」という精神分析学発達理論の理解が要求されることにもある。

エリクソンがアイデンティティ概念を「内的同一性」の意味で用い始めたのは、第2次大戦中、精神疾患から米軍を除隊された退役軍人を多く診た経験の中からである⁴⁾。これら兵士は、戦場の心的トラウマ (外傷) から自己喪失を起こし、自分が誰であるか *identify* できなくなってしまう

2) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, New York: W. W. Norton, 1968, p. 15 (『主体性 (アイデンティティ) - 青年と危機』岩瀬庸理訳, 北望社, 1969年)。以下、本文中頁記号 (p.) 省略。

3) エリクソンの説明自体が今ひとつ明確さを欠くことも否めない。訳者の一人、小此木啓吾が指摘するように、難解な文体だということもある。

4) Erik H. Erikson, “A Combat Crisis in a Marine,” *Childhood and Society*, Second Ed., N. Y.: W. W. Norton, 1963, pp. 38-47 (『児童期と社会』, 草野榮三郎訳, 日本教文社)。

たのである。エリクソンはこのことから、自己同一性は、人間の（社会）環境との関係において、自己を位置づけ、統一性を保つ自我の機能、意識的、無意識的努力によることに気づいたのである。

アイデンティティは、自己の同一であること *sameness* とその持続 *continuity* が基本である。同一性は、エリクソンによると、その感覚 *sense*⁵⁾ 或いは知覚 *perception* [1968:50] によってもたらされる。しかし、エリクソンはアイデンティティを単に自己内過程に留めていない。彼は、精神分析を社会科学と結びつけようと努め [1968:48]、当概念により、個人と社会の「相互補完関係」を明らかにしようとした [1959:53]。この関係を表すのに、エリクソンはアイデンティティを2つに分類する。1つは集団的アイデンティティ *group identity* で、もう一つが個人的、自我アイデンティティ *ego identity* である。両者は同じものではなく、平行に存在し、かつ相互関連している [ibid.: 50]。

集団アイデンティティと個人アイデンティティ

集団及び個人アイデンティティに共通するのは、自己を他と区別する特徴、他にないもの、自分（達）らしさである。従って、集団アイデンティティの場合は、文化、伝統、組織といったものが重要になってくる。だが、集団、社会のアイデンティティを構成するのは個人の意識である。文化、伝統、慣習等、物質的、実体的、外観的なもののみがアイデンティティだとしたら、それは個人意識との直接のつながりは見いだせない。むしろ、集団アイデンティティを構成するのは、一見して分かる他集団と差異を示す特徴ではなく、集団を結束させること、人々を結びつけることにこそあるだろう。つまり、これが「自分たち *we*」の共通点で、他と違うものだ、と信じることにある。

つまり、人々を結びつけ、伝統的行動様式、価値観、思考へと、とりわけ若者を組織し *organize*、統合する *synthesize* こと [1968:47] に集団アイデンティティの欠かせない機能がある。統合機能が文化的差異を社会の統合のシンボルへと高める。

5) E. Erikson, *Identity and the Life Cycle, Psychological Issues Vol. I, No. 1*, New York: International University Press, 1959, p. 9 (『自我同一性——アイデンティティとライフ・サークル』小此木啓吾訳, 誠心書房, 1983年)。

アイデンティティを考慮する上で、この統合機能が重要な役割を果たしていることがしばしば見落とされている。この機能は、構成メンバーにそうしたアイデンティティを内面化させるのである。つまり、集団アイデンティティは、各人が共有しあうことで成立するのである。それは個人アイデンティティの一部を構成していることになる。ここに於いて、集団アイデンティティと個人アイデンティティが交差するのである。

個人アイデンティティを見てゆこう。先ず「自己」とは何かが問題になる。これはアイデンティティ概念以上の難問である。勿論、肉体は重要な構成要素である。しかし通常、それ以上に心的側面が取りざたされる。それは、「心」「精神」「魂」「性格」「気持ち」等の概念で示される。これらの語の意味は微妙に異なる。とはいっても、何を指しているのか明確にすることは難しい。この心的なものの定義の難しさが、自己及びアイデンティティの定義の困難さにつながっている。

心等は肉体に対置された非物質的存在であり、肉体の内部にあって、それをコントロールする。この見方はデカルト以来の心身二元論であり、心身因果論である。勿論脳が身体の制御中枢であるが、脳という物質と精神とは異なる。精神は現象なのである。問題は、現象を物質と平行に存在する実体と見なすことである⁶⁾。その結果、精神的自己もアイデンティティも実体化してしまい、逆に掴み所がなくなってしまう。

上記、心、精神、魂、心理等概念が「何を指しているか」と尋ねること自体が間違っている。語が全て対応する対象を持っていると考えるのは、語に対する誤った観念に基づいているのである⁷⁾。確かに言語には世界を代理的に表現する表象作用がある。それによって我々はコミュニケーション

6) これはライルのいう「範疇誤謬 *category mistake*」である [Gilbert Ryle, *The Concept of Mind*, Hutchinson, 1949, p.18]。

7) ソシュール言語学によるならば、語は現実世界に一对一の対応物を持つ訳ではなく、言語システムの中でその意味が生み出される [Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, Payot, 1916 (『一般言語学講義』小林英夫訳, 岩波書店, 1972年), また, 言語哲学者ヴィトゲンシュタインによると、語の意味とは、その対象ではなく、その使用である [Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, 1953, § 43 (『哲学探究』ウィトゲンシュタイン全集 8, 藤本隆志訳, 大修館書店, 1976年)]。

に於いて種々の指示を伝え合う。しかし、語の表象は抽象化作用をも伴う。この抽象性、間接性が人間の抽象的思考を可能にし、精神文化を育ててきた。だが同時に、心、精神を抽象実体として物象化してしまう。

他者アイデンティティの認知

他者のアイデンティティを考えてみよう。我々は他者の、先ず外見に同一性を知覚する。極めて容易いなことに思えよう。確かに、頻繁に会っている知人に関してはそうかもしれない。外見にさほど変化はないからだ。だが、服装は変わる。髪型、化粧、表情に、時には驚かされる。だが通常は同一人物として認知する。それは変化の中に同一性を見るからである。

これはある種の「抽象化」の能力と言える。変化の因子を捨象し、同一性を構成する要素とゲシュタルトを把握する。この能力は同一のものの知覚のみではない。同種のもの近似性、類似性の知覚である。例えば「木」を見たとき、各々の木の個性を捨象し、「木」なる同一性を知覚する。これは集団同一性の知覚に当たる。多様性の中で本質を把握する、現象学で言う「本質直感」⁸⁾である。

「外見」は勿論顔（顔立ち）だけではない。表情、体つき、後ろ姿、身振り、歩き方、姿勢、声、口調、口癖、これら要素を統合し、同一性を知覚する。だが、それは、外見だけに留まるのだろうか。外見による判断はむしろ誤りを導きやすい。声をかけ、声を聞き、名前を確認する。「やはりあなたでしたか」、「すみません、人違いでした」といった経験は誰にもあるだろう。だが名前を確認しても、「まるで人が違ったようだ」と同一性をいぶかしがる場合もある。この「人が違う」は、純粋な外見よりも、性格を指すことが多い。

では、性格は外見ではなく、内面であろうか。相手の性格は、話をしてみても、その話しぶり、話の内容、振る舞い、仕草に見る。しかしそれは、内面の推測ではなく、話、行動そのものの特性、その仕方に見る、いや仕方として見るのである。考え、感情も、話、表情といったコミュニケーションに現れる。つまり、心、精神といった「内的世

界」も、確かに語は「内部」を指しているが、現実には、或いは語の「意味」としては、外的な「表れ」なのである⁹⁾。

自己客観視

では、「自己」の場合はどうか。そこには内的世界への直接的アクセスがある。ならばこの内的世界に、我々は統一性、不変性、恒常性を感じ取っているだろうか。そしてそれが、アイデンティティと呼ばれるものだろうか。

我々が「内的世界」に浸りきっているとき、即ち、感じ、考え、行動に没頭している時、内と外との区別がなく、そのまま同時に外的世界に生きている。自己を人格的統一体として、他者を知覚するようには知覚していない。だが時には自己を意識する。それは他者が自己を見ている時である。その他者の視線に、自分が他者を特徴づけ、人格的同一性を見て取るその仕方を感じ取る¹⁰⁾。そして、自己を同様の仕方において外から見て、一個の人格としてその同一性を感じ取る。

エリクソンの言う「内的同一性の知覚」とは、この様に、他者の視線の導入であり、自己を客観的に見ることによって可能になる。そもそも、性格は人との比較において浮かび上がってくる。アイデンティティとは本質直感であると述べたが、それは類似性の把握であり、換言すれば、「類型化」である。アイデンティティとはその類型の中への自己の位置づけである。とは言っても、一つの類型にはめ込むのではなく、各種の類型を組み合わせる。「冷たい」「几帳面」「頑固」等である。

それは自己に対する「客観性」の獲得とも言える。自己から離れた地点に視点を置く、他者の視点から見る、或いは逆に、他者の間に自己を置き、比較対象として見る、ということである。

他者の反応、評価も重要な意味を持つ。他者は自己理解の「鏡」である。コミュニケーションに於ける自己の言動の意味は、他者の反応、言動に示される。更に、他者による自己の類型的評価は、自己評価に大きな影響を与える。人が他人による評価を気にする理由がそこにある。自己評価が定

8) Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie*, Martinus Nijhoff, 1950 (『イデー』 渡辺二郎訳, みすず書房, 1979年)。

9) ヴィトゲンシュタイン前掲書。

10) エリクソンは、他者が自己の同一と連続性を認知しているという知覚を、自己同一性感覚の不可欠な要素に挙げている [1968:50]。

まらない、客観性が欠ける世代ほどこの傾向が強¹¹⁾。エリクソンの言う青年期のアイデンティティ・クライシスの理由の一つはここにある。

未来志向

過去の行動から反省的に人格統一体を描く。それは実像的、現実的自己像である。自己はしかし、「見る」ことに於いてのみ浮かび上がる存在ではない。行動する存在でもある。常に自己を忘れて行動し、反省的に自己像を捉えているのではなく、自己意識のもとに行動することが日常生活の多くを支配している。自己像に基づく自己規律に従って行動する。習慣化している部分が少なくないとはいえ、自己規制が働いている。朝決まった時間に起き、会社に行き、仕事をする。こうしたルーティンが自己アイデンティティを構成している。これらを見捨てるなら不安を引き起こす。

しかし、行動を規定するのがアイデンティティならば、それは未来への志向をも含むことになる。希望、野望、野心、願望といったことは、必ずしも手の届かない夢としてではなく、現実性のある行動の目標ともなり、動機づけとして働く。計画、人生設計、予定、期待等行動指標を指す概念はアイデンティティの欠かせない一部である。子供は大人になったら何になりたいかを考える。そしてそれが彼のアイデンティティを形成してゆく。

過去から築き上げた自己像、そこにも既に行動指標はある。自己に相応しい行動である。そこから外れた行動は、自己像の矛盾、崩壊の可能性への不安を引き起こす。日々の行動は、したいと欲する行動、それに対する自己規制の結果であり、行ったことへの解釈、自己像への統合を伴う。自己像による行動規制は、純粋に自己の欲求によるものではなく、社会的要求でもある。自己像は他者の中に自己を位置づけることで成立することは前述したが、それは即、社会の中に自己を位置づけることを意味する。この様に、アイデンティティは、行動から生じるイメージというだけでなく、イメージを構成すべく行動を統合する synthesize ことなのである。

社会の期待・圧力

社会は構成員に対し、期待する行動と行動規制を持つ。ルール、道徳、役割等である。社会は構成員の行動により形成される。従って、構成員の行動を組織することは、社会組織、秩序を維持する上で必要不可欠なことである。法律、警察、裁判システム等、罰則による強制の外発システムと並び、行動を促し、導く内発システムを有する。教育が重要な役割をするのは言うまでもないが、また社会的評価、金銭的報酬を伴う道徳律、地位、役割は、社会の要求、期待に応えることで満足が得られるシステムである。

社会学シンボリック・インタラクショニズムの役割理論によると、人の発達・社会化は役割取得 role-taking によってなされる。人は、年齢に相応して、家族、社会からその中に於ける位置と役割を果たすことを期待される。期待に応え、役割を身につけることで、周りに評価され、自律を認められる¹²⁾。エリクソンは、役割取得をアイデンティティ理論の一部に取り込んでいる。アイデンティティの確立とは、自己の社会の中での位置づけと自己評価の確立である。

しかし、アイデンティティ理論は、精神病理学である精神分析学の自我理論として提唱された。自我は、自己を守る防衛機制としてアイデンティティを発達させる。自己は社会、集団からの自己を脅かす圧力にさらされている。一方で群衆の脅威 [1959:6]、他方、自己内部でも欲動の無政府状態 anarchy of drives [ibid.:110] によってコントロール不能の行動に走る危険性を抱える。その仲介、調整機能として自我とそのアイデンティティがある。社会の要請、要求をアイデンティティの一部として内化し、自己の行動指標とする。

社会の圧力は群衆の脅威のみではない。社会は個人を戦場に送りもする。そこでの状況はまさに自己の存続の危機の連続以外の何物でもない。エリクソンが言及するように、自己喪失する者もいる。しかしそのような状況でも熱心に任務を遂行する者もいる。「自己の使命」として、内的葛藤、恐怖、逃げ出したい気持ちを克服するのである。

11) エリクソンは、若者はしばしば奇妙なまでに、時には病的に他人の目に映った自己の姿を気にすることに言及している [1968:128]。

12) G. H. Mead, *Mind, Self and Society*, ed. by C. W. Morris, The University of Chicago Press, 1934 (『精神・自我・社会』稲葉三千男他訳、青木書店、1973年)。

日常生活でもしばしば社会は個人に厳しい要求を課す。厳しい競争にうち勝つ能力、精神力とそのための鍛錬を課す。学校教育でも、読み書き、論理、知識のみならず、集団生活、規律、生産性、創造性、協調性、競争心を植え付けられる。

集団のプレッシャーは秩序に関するものが少なくない。何故なら、集団維持に秩序は欠かせないからだ。現代社会においては、例えば現代日本社会では、生産性（能力）と民主主義が2つの基本的原理なはずだが、人間関係、伝統、慣習等複雑に絡み合って、社会秩序を構成している。時にはそれぞれの原理が矛盾しあう。世代間でも価値観は変化する。全体の変化の中で、進取派と保守派の対立葛藤はどこにもある。そして集団ごとにアイデンティティがある。子供の遊び仲間にもピア・プレッシャーがある。その中で適応し、かつ人格的統一体を維持し、自己の尊厳を追求することには困難も伴う。

超自我とアイデンティティ

フロイト精神分析理論では、自己内の社会の代理機関は「超自我」と呼ばれ、道徳、モラル、勤勉さ等、社会の行動倫理を代表する¹³⁾。自我は他者の期待を自己のものとして取り込むことで、自律的行動をしつつ、社会との調和をとることが出来る。だが超自我は常にそのまま自己の行動を導くわけではない。「理想我」という別名が示すように、現実我とは多少の乖離がある。自我は、超自我の（しばしば過剰な）要求に応え、イドの衝動を社会に適應する形に変えること（転移、昇華）が出来ず、過剰な抑圧から不安神経症状を示す者もいる。自我は自己の深部から湧き上がる衝動と厳しい社会的要求の板挟みとなり、自己を守るべく機能しているのである。

エリクソンは、超自我を組み入れた自我機能としてアイデンティティを措定している。前述のように、集団アイデンティティは集団の個別性、独自性、結束性の維持の機能を果たす。それは、自己のアイデンティティに取り込まれることにより、「調和的」に行動を導く。調和的とは、個人間、そして個人内に於いてである。個人は、集団アイ

デンティティである文化、伝統に従うことで、自動的に他者と調和的に行動する。そしてそれにより、他者から評価される。他方、それが自己内にあるが故に、自己の欲求として行動できる¹⁴⁾。

個人は自己を集団と同一視することによって、集団アイデンティティを自己内に取り込む。エリクソンは同一視 identification と同一性 identity は語源だけでなく、心理的にも同根を有するとする [1968:158]。子供は社会的な様々なモデルに同一視を繰り返しながら大人になる。同一視は「真似」行為に観察される。エリクソンはアイデンティティが同一視の総和に等しい訳ではなく、前者はそのゲシュタルトであるとする [ibid.]。また、思春期の終了は同一視を脱して自己アイデンティティを確立する時期だという [159]。

見逃してはならないのは、同一視がアイデンティティを形成するメカニズムであるということだ。同一視は成人にも頻繁に観察される。自己が同一視する集団、換言すれば、アイデンティティを共有する集団への批判、攻撃は、自分へのそれとして反応する。ここに、アイデンティティが国際紛争の大きな問題になる理由を見ることが出来る。

他者性と差異化

自己の認識には他者が必要である。自己の客観視は他者の中に自己を置く。そして他者との差異に自己が浮かび上がる。アイデンティティとは差異の認識、いや「差異化」というべきであろう。個性とは個人が誰でも持っている。个性的とは個性の強調である。同様に、アイデンティティとは他者との違いを強調することである。

個人のアイデンティティは、社会の中での自己の存在価値を他者との相違、個性に求める。集団協調性を求め、個性を圧殺する傾向が強いと言われる日本社会でも、小さな違い、「こだわり」に固執することにアイデンティティを見いだす傾向は観察される。特に若い世代ほど、自分を目立たせることで「自己主張」し、自己の存在価値を訴える。他者の否定、例えば悪口を言うことにより、

13) Sigmund Freud, *Abriss der Psychoanalyse*, Fischer Verlag GmbH, 1940 (フロイト選集『精神分析療法』小此木啓吾訳, 日本教文社)。

14) フーコーは、「自己」そのものが、社会が個人を管理し、生産に駆り立てる装置であるとする [Michel Foucault, *Technology of Self* (『自己のテクノロジー：フーコー・セミナーの記録』, 田村他訳, 岩波書店, 1990年)]。

自己肯定をしようとするのもよく見られる。

「アイデンティティとは常に、否定という狭い視野を通してはじめて肯定に達する、構造化された表象である（スチュアート・ホール）¹⁵⁾。」

集団アイデンティティの差異化作用は、他集団の否定、排除、自集団の純化といった、選別、そして、ブルデューの用法における「卓越化 distinction」へと向かう傾向を示す。ブルデューは、文化（音楽、美術、趣向を含め）が自己の社会的位置（階層）を、特に下位集団に対し明確な卓越性を示す記号として選択、形成されると論じる¹⁶⁾。

だが、他集団に厳しく、自集団に甘い、ということではない。寧ろ、集団の統合、統制、秩序の維持のため、集団アイデンティティの強化と内化が常時課題となる。そして他者との境界維持のため、相違についての寛容性もその範囲に限られ、個性の抑制も行われる。

自集団の同一性は自明な実体としてあるのではなく、近似性は相対的である。時には他者によって与えられる否定的呼称、レッテルによってアイデンティティが構成される。スチュアート・ホールが言うように、「アイデンティティは一つの過程として、一つの語りとして、一つの言説として、常に他者の立場から語られるものである」¹⁷⁾。

従って、「他者」の区切り、他者性の定義によって、集団は拡張も、縮小もするし、各個人は拡大集団、サブ集団、異なる文化集団に同時に所属し、それぞれの集団に忠誠を示すことが可能となる。それは「敵」の出現によっても規定される。2001年9月11日 N. Y. 攻撃は、米国人の愛国心と一体

性を著しく高めた。それ故、集団アイデンティティ強化のため、「仮想敵」が設定される。

ウィリアム・コノリーはアイデンティティの政治性を指摘する。差異を他者性に投射し悪とみなすことで、自集団内の統一性を保つ。「テロリズムを他者とする国家システムによる規定が、国家と国家間システムに、国際領域における主権の論理の擁護を可能にする。それは非国家的な担い手が暴力をふるう原因である構造的な条件を、国家や国家間システムが修正する能力を持たないことも覆い隠してしまう。……しかし、国家をスポンサーとする戦争や、戦争以外の軍事的行為によって失われる罪のない人命の数は、比較すれば莫大である。「テロリズム」[と決めつけること]は特定の国家のアイデンティティや国家システム全体を守ることになる……」¹⁸⁾。この言説は、9.11 N. Y. 攻撃への米国の対応にそのまま当てはめることが出来る。

否定的要素を全て他者に転じ、非西洋、オリエントとすることで、西洋を定義づける、これがサイードの『オリエンタリズム』¹⁹⁾における西欧自文化中心主義批判である²⁰⁾。

自己アイデンティティは集団アイデンティティの内化の側面を持つ。且つ、類型化であるという意味で、集団への帰属によって獲得される。アイデンティティが「集団帰属性」と訳される理由がそこにある。個人の敵はしばしば、個人を侮辱し、個人の尊厳、アイデンティティを傷つけた他者で、激しい憎しみの対象となる。個人のアイデンティティの基盤となる自集団を侮辱する敵は、個人の敵と同等か、それ以上の憎しみの対象となる。

この差異化、他者否定性は、アイデンティティの自己同一性形成と自己肯定と表裏一体であり、向上心、身内、同胞への愛といったポジティブな面の裏に潜む、暗いネガティブな作用、力である²¹⁾。戦争、民族浄化を導く、エリクソンの言う、

15) Stuart Hall, "The Local and the Global: Globalization and Ethnicity," in *Culture, Globalization and the World-System: Contemporary Conditions for the Representation of Identity*, ed. by A. D. King, SUNY Press, 1991, p.21 (『文化とグローバル化』, 山中他訳, 玉川大学出版部, 1999年)。

16) Pierre Bourdieu, *La Distinction*, Éditions de Minuit, 1979 (『ディスタクシオン I, II』, 石井洋二郎訳, 藤原書店, 1990年)。

17) Stuart Hall, "Old and New Identities," *Culture, Globalization and the World-System: Contemporary Conditions for the Representation of Identity*, p.49. ここで意味することは、アフリカ人は自分たちを「黒人」と、アジア人は「黄人」と思っていた訳ではなく、それは「白人」によって与えられたアイデンティティであり、白人は、他者の有色性の自己内否定の上に、自己のアイデンティティを形成している、ということである。

18) William E. Connolly, *Identity / Difference*, Cornell University Press, 1991, p. 207 (『アイデンティティ/差異』 杉田他訳, 岩波書店, 1998年)。

19) Edward W. Said, *Orientalism*, N. Y.: Pantheon, 1978 (『オリエンタリズム』, 今沢紀子訳, 平凡社, 1986年)。

20) コノリー, サイード共に, ニーチェ, ハイデッガー, フーコー或いはデリダの反近代代理性主義の系譜に属する。

21) 鎌田勇, 「自己と他者」(『I・文化』 富岡他編, 培風館, 2000年所収) はこの問題を論じている。

アイデンティティの「邪悪で活力に満ちた」側面がここにある。

個人と社会

エリクソンはアイデンティティ概念により、社会と個人の相互関係を示す意図があったことは前述したが、一方でそれは、社会との相互作用の中での個人の主体性を強調し、自己の確立を理論化する試みであったと言える。その意味では、ネオ・フロイディアン²²⁾、或いはネオ・マルクシスト²³⁾同様、自己に至上の価値を置く近代個人主義の申し子と言える。民主主義は個人の権利の尊重が基本であり、個人の自律性を前提にしている。個人が伝統、無知蒙昧、支配等あらゆる桎梏から解放され、自ら考え、判断する主体、自らの主人となることが、近代化による科学技術の発展に平行して期待されてきた。

他方、彼らが指摘するように、個人の集合としての国家を社会組織の単位とし、個人を組織化するという過程が同時に進行してきた。国語を制定して国内のコミュニケーションを容易にし、政治・法制度を整備し、社会福祉を行い、時には戦争を遂行するという運命共同体、文化的統一体である国民国家 nation state は、いわば個人の制約を行うことで、個人の権利を保障するという矛盾する2つの方向を同時に持っている。

アイデンティティは個人と集団、個人の自律性と集団帰属性のダイナミックな、或いは弁証法的関係を示している²⁴⁾。確かに、集団アイデンティティを構成するのは個人のアイデンティティである。例えば、自由、民主的、個人主義的といった個人の集合がアメリカ合衆国を構成している。だが社会から切り離れた個人がそうしたアイデンティティを確立した上で、集合的に社会を形成しているのではなく、社会のそうした価値観、アイデンティティを自分のものにするによって、個

人主義的個人となるのである。この様に、社会が個人を作る構造がそこにはある。

確かに、社会が個人により大きな自由を与える傾向は、否めなく存在する。日本に於いても、人権の尊重、自由の保障が社会の色々な側面で、様々な形で進行している。国民によるそうした要求が高まっていることも理由である。だがまた、自由で創造的な個人を社会が必要としているという側面もある。産業社会では強い自己意識が高い生産性と、ポスト産業社会では大量消費と結びつく。共に競争社会であることに違いはなく、能力と上昇志向が成功の秘訣となる。また、構成員の多様性が社会の豊かさとなる。

社会内サブカルチャーの多様性の中で、個人の選択肢が広がった。また集団帰属性の無理強いが弱まり、比例して個人裁量に任される領域が広がっている。当然個人の責任、判断能力、自律性が求められる。

国民国家の弱体化とエスニシティ

国民国家は、国民概念を近代の集合単位として積極的に謳ってきた。フランス市民革命は、王侯、貴族、教会等による分断、支配から民衆を解放し、自由な個人から構成される共和国を建設することで、ルソーらの人権思想の実現を目指した。それは人間が遍く所有する理性に基づく、合理的システムとしての社会組織の設立であった。

主権国家は、自由、平等、生存といった権利と共に、納税、徴兵といった義務を課す。それには政治、経済の単位である運命共同体の一員としての同族意識、アイデンティティを必要とする。国語、国家、国旗を定め、教育にも国民一体化のイデオロギー、愛国心を高める要素が盛り込まれる。国体行事を行うことにより、国民としての同一性意識は高まる。

しかし、共産主義陣営の崩壊による冷戦の終結は、国家による国民の強権的締め付けが正当化されなくなり、また前述のように帰属性が弱まり、選択肢が広がった結果、個人は自己アイデンティティの拠り所となる集団を自由にかつ複数選ぶことが出来る。近代を特徴づけてきた国民国家による統合は、それ自体が現在の自由なアイデンティティと矛盾する性格を帯びてきた。

スーザン・ストレンジは国家の権威の永続性を

22) 精神分析社会学派、フロイディアン左派とも呼ばれる。H. Sullivan, E. Fromm, K. Horney, A. Kardiner 等。

23) 特にフランクフルト学派。彼らはマルクス主義と精神分析理論を結合し、社会変動を生み出す個人の心理のメカニズムを明らかにしようとした。

24) Peter Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality*, New York: Doubleday and Company, 1966 (『日常世界の構成』, 山口節朗訳, 新曜社)。

前提とした国際関係論を批判し、国家のパワーは着実に後退しつつあることを指摘する。直接的には、それは金融、産業、貿易での世界市場の支配力が増大したことによる。彼女は、政治家、官僚への大衆の軽蔑は殆どの資本主義国で育ちつつあることを指摘し、普通の市民の認識を信頼すべきだという。確かに一方で、国家の介入は日常生活でも拡大が実感される。日本を筆頭とした東アジア諸国は、国家の強力な指導と自由貿易の制限で経済成長を実現してきた。だが状況は急転しつつある。日本でも小さな政府、規制緩和と自由競争原理の導入、民間主導へのシフトが、構造改革と呼ばれ、経済再生の不可欠要因と認められている。ストレンジは国民アイデンティティは当然相対的に弱まっているとする²⁵⁾。

国家アイデンティティの後退に伴い、集団アイデンティティの根拠として再浮上してきたのが、より「自然な」集合、エスニシティ ethnicity (民族) である。世界各国でエスニシティを単位とした集団の再編成が、国民国家の枠を壊すまでに進行しつつあるように見える。

だがこれは突然始まった新たな動きなどではなく、有史以来人類の集団結合の単位として、また近代になっても国家の影で隠然と存在し続けてきた。国民国家の境界には、複数民族を包含するケース、また民族を分断するケースが少なからず見られる。アフリカ、中近東、アジア等旧植民地は、ヨーロッパ宗主国によって民族を無視され、勝手に境界線を定められた。だが、ヨーロッパ諸国にしても、国境の制定は領土争奪戦争の結果である場合が多く、民族単位とは言い難い。また少数民族は圧殺、包含・同化といった道筋をたどってきたケースが多く見られる。先住民と呼ばれる人たちが多く、合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドを始め、ヨーロッパ諸国にも点在し、かつ日本にもアイヌに見られるが、それはしばしば国内植民地とも称される²⁶⁾。

日本に関しては、明治以来の多民族容認から、

第二次大戦前からの単一民族、文化の同質性強調の政策変更がなされたが²⁷⁾、それは民族的アイデンティティが、国民アイデンティティの感情的基礎として用いられたのである。

グローバリゼーション

国民国家の基盤を揺るがしてきたもの、それは民族意識の台頭ではなく——後者は原因としてよりも、結果として、と言えよう——、昨今の「グローバリゼーション」である。グローバリゼーションを世界の一体化とひとまず定義しておこう。勿論、単純に国境がなくなって、世界が一つの共同体になると言っているのではない。ただ、国民国家を成立させてきたものを、グローバリゼーションが揺るがしている、ということである。それは国民アイデンティティが脆弱化しつつあるということである。グローバリゼーションが直接的にもたらしたとは言い難いかもしれない。前述のように、集団が個人を強権的に縛ることは困難になった。それが人々の間にグローバリゼーションを受け入れる素地を作ってきた。

直接的には、情報技術の進歩と経済活動の拡大、とりわけそれが結びついた形での金融資本の世界規模化がグローバリゼーションを加速化した。「世界システム論」のウォーラスティーンによれば、世界のシステム化は近代の開始と共に始まった。「近代化」modernization、それは世界の西欧化であり、冷戦の終わりは二極化世界支配構造の、アメリカを頂点とした一極支配への移行を意味した²⁸⁾。

前出のストレンジは、「市場」の超国家的 trans-national パワーが国家を凌駕しつつあり、企業活動、保険、IT、犯罪、NGO、環境といった領域で国家の役割を縮小させつつあるという [1996]。ストレンジの指摘は国際政治、経済の分野でめずらしいものではない²⁹⁾が、市場、企業

25) Susan Strange, *The Retreat of the State: The Diffusion of Power in the World Economy*, Cambridge University Press, 1996 (『国家の退場』、櫻井公人訳、岩波書店、1998年)。

26) 例えば、Michael Hechter, *Internal Colonialism*, University of California, 1975。

27) 『単一民族神話の起源』、小熊英二、新曜社、1995年
28) Immanuel Wallerstein, *The Modern World-System*, San Diego: Academic Press, 1974 (『近代世界システム』川北稔訳、岩波書店、1981年)、*After Liberalism*, N. Y.: The New Press, 1995 (『アフター・リベラリズム』、松岡利道訳、藤原書店、1997年)。

29) 例えば、Matthew Horsman & Andrew Marshall, *After the Nation-State: Citizens, Tribalism and the New World Disorder*, London: Harper Collins, 1994。

による支配力の増加は、福祉、人権、社会的マイノリティーの保護等に不安を残すのも事実ではある。西欧諸国で軒並み社会民主主義政党が政権をとっている理由がそこにある。

他方、2002年初頭からの共通通貨ユーロの使用が開始され、欧州のEUへの統合はいよいよ現実化へのプログラムの一步を踏み出した。これはグローバル化同様に、ITと経済活動の広域化、国民意識の希薄化が大きな動因となった。

だが、こうしたいわば共同体組織の広域化は、個人アイデンティティの現代的形態からすると当然とも思える。集団アイデンティティへの拘束が弱まり、個人が集団を基盤とするのではなく、理性という個人の資質を基盤として自己のアイデンティティを確立する以上、個人の平等が地域を越えて認識されるのは必然の結果に思われよう。個人は家族、身内、血縁、地縁、民族を越えて国民として統合され、更にあらゆる個人を縛るものを越えて人類の一員、コスモポリタンとしての意識を持つものと想定される。

この様な自由な個人は「市民 citizen」と呼ばれ、市民革命であったフランス革命がもたらした国民国家によって、その近代的出現が可能になった。そして市民の成長が（超 city）市民共同体意識とその活動を導いてきたとも言える。国民国家が作り出してきたものが、国民国家を崩壊させるという弁証法的運動がそこには観察される。

市場と企業支配の論理に対抗するのは、この市民意識の高揚しかないように思える。だが、フランス革命はブルジョア（有産者階級）革命でもあり、市民即ちブルジョアの利益の追求が動機としてあった。マルクスは市民概念とそれに基づく国民国家の欺瞞性をつき、万国の労働者の団結、国家の止揚を訴えたのである。

EUは更なるグローバル化への過渡的形態であろうか。きっかけは経済特別地域としての自由貿易圏であったという意味では、地域主義であり、ヨーロッパの経済繁栄を守るということであつたかもしれない。それは今後のEUの発展を見守るしかない。しかし、ヨーロッパに於いて、民族主義の台頭が著しいのも事実である。それには二種類ある。一つは、各国議会での右翼・民族主義政党が議席をのぼしていることで、これはEU統合化への反動とも言えよう。もう一つは、少数民

族運動の独立運動とも結びついた激化である。こちらは、EU統合に伴い、国家統合の締め付けが弱まる期待と、経済的自立が寧ろしやすくなる、という見通しのもとのこと、と言えよう。

世界の未来とアイデンティティ

グローバル化は世界の近代化の延長であり、情報、交通、経済活動といったコミュニケーションの進化がその展開を急にした。情報の共有化は、科学技術の浸透に伴って、世界中の人々の生活スタイルを次第に似通ったものになっている³⁰⁾。

だが、現状では、各国の近代化、生活レベルには、相当の差がある。特に、欧米を頂点とした北半球高緯度に位置する先進国とそれより南に位置する発展途上国の間では、越えがたい断層があり、いわゆる南北問題となっている。グローバル化の進行は、この格差を埋めるどころか、拡大する結果を招いている。従って、グローバル化は、世界の人々を平等な個人としてではなく、地域格差に縛られた、異なる生活水準と教育、仕事の機会の不均等の状況に置いている。その意味ではグローバル化は、世界の一体化ではなく、地域に基づく分断であるとも言える。ウルフ・ハナーズの言葉を借りれば、それは「平等主義的なグローバル・ビレッジでは決してなく」、「中心と周縁の不均衡として、かなり堅固に構造化されている」³¹⁾。

確かに人は個性を求める。自己のアイデンティティは他者との相違にある。だが、自己のユニークネスは文字通り全く単独ということではない。社会の別のモデルを採用し、そしてその組み合わせに独自性を主張する。そもそも人は集団、文化の内に自己の基盤を持つ。言語を習得して知性を高める。知性、技術はコミュニケーションから発展する。一人では不可能なのである。

従って他者との違いの強調は、集団アイデンティティの場合には、他集団との区別、識別へと導く。エリクソンは、強い（他集団否定的な）指導者に導かれ、融合することによってのみ救われると感じる若者について言及する [1968:168]。現在、

30) Cf. Wallerstein 1991, p. 131.

31) Ulf Hannerz, "Scenarios for Peripheral Cultures," in *Culture, Globalization and the World-System*, p. 107.

日本でも、世界各地でもそれはしばしば観察される。これはエリクソンの言う「自己放棄 [ibid.]」というより、自己アイデンティティ探求の、外的には（別の価値観からは）非生産的な試みなのである。

相違の強調は競争状態に於いては、違いを優劣の根拠とする「卓越化」の原理となる。実際のところ近代に於いて、世界の西欧による支配は常に文化の優劣を押しつけてきた。現在の文化相対主義、多文化主義は文化の優劣を否定する。だが、グローバリゼーションは西欧（特に米国）の基準の世界標準化である。自文化を基盤に反撃に転じたい人々がいても不思議ではない。地域格差を正当化し、或いは尊厳を維持するため、文化とアイデンティティを強く主張していると言えないか。

ここに、スチュアート・ホルの言うような、エスニシティが「ローカルで周縁的な運動の誕生と発展」として、同時に「自らの排他的、防衛的な飛び領地」として、国家的アイデンティティと「同じくらい危険な」アイデンティティとなるのを目の当たりにする³²⁾理由がある。

冒頭で触れたハンティントンには、人々は自己に似ていること、特に宗教、言語、に基づいて自然的集合を形成し、文明はそうした集合から構成されるとする。彼の指摘のように、現在の戦争の多くは、文明間の断層を形成する地域に起きつつある。彼は、文化、アイデンティティの相違に基づく、分離と対等な関係に於ける互いの尊重が必要であるとする [Huntington 1996]。

人は相違に基づく分離を必要としているのだろうか。人は所属・準拠集団を必要とする。人らしく振る舞い、言語を学び、知性を習得し、価値（「意味」と言い換えても良い）を会得する。他者に認められてこそ自己の存在意義があるのも、ここに根拠がある。これらは全て、身近な関係者 significant others とのコミュニケーションに於いて生じる。だが他集団とのコミュニケーションは世界を更に広げる。他とのコミュニケーションのない孤立した集団は、同じ生活形態を変化なく続ける。

だが、他者から学ぶということは、それを身につけることであり、他者、他集団とのコミュニケー

ションは淘汰を伴う。多くの人の選択——時には力による強制——は、互いの相似性を高め、集団の拡張を結果する。グローバリゼーションはその帰結と言える。

文明とはハンティントンによれば、類似者の集合である。しかし、通常現代文明と言えば、それは西洋文明を指す。文明 civilization は啓蒙と結びついた概念であり、その時のもっと進んだ文化と道具、技術を指す。何がもっとも進んでいるかは、それは競争による淘汰、或いは「覇権」を握った文化、集団へと帰属させられてきた。

だが集団の拡張は、分派的小集団化を同時に伴ってきた。それは集団内権力闘争である。競争は差異に基づく卓越化であり、差異の強調である。アイデンティティとは競争環境下での自己の存在価値主張である。競争に勝ち、社会的階段を上がって行く時はその維持は比較的容易い。負けた時、或いは方向を失った時、自己の存在意義を見失った時、アイデンティティ・クライシスを迎える。他方、競争のない状況では、アイデンティティはさして問題にならない。

個人のアイデンティティは、強い自己意識を持った、生産性の高い個人を創出するが、それは近代社会の要請である。個人アイデンティティと集団アイデンティティの相関関係は、個人を不可避的に集団に結びつける。しかし、ハンティントンの言うようにアイデンティティが戦争まで導く対立を生むのではない。競争的環境下、平等でない関係がアイデンティティを先鋭化するのである。人々は、自己維持のため、団結性 solidarity を高め、文化、民族性等差異をイデオロギーとして集団を統合する。この集団同一性の統合、維持及びその内化が、競争的現代社会における生産的自己の育成と共にアイデンティティの今日の意味である。

文化的多様性の否定が本稿の意図ではない。多彩な文化は人類の豊かさと可能性を表している。また公平かつ自由な競争の効能を否定しているわけでもない（そのような競争がどんなものであるかは想像しにくい）。本稿が示したのは、アイデンティティの差異化、卓越化、イデオロギー的、他者否定的側面であり、そしてこれが、民族主義的熱狂、排他的愛国心を導く、「邪悪で」「活力に満ちた」面なのである。

32) 前掲書、36頁